

## 学士力を基礎とした大学生に求められる 資質能力の質保証に関する調査研究

赤堀侃司<sup>1</sup>

### 概要

白鷗大学教育学部では、その将来構想の策定を検討しているが、その中心は教員を含め社会で活躍できる人材を輩出することであり、そのためには求められる資質能力を明らかにし、その資質能力を養成するカリキュラムを開発することが、重要な課題となる。今日の大学に求められる質保証は、上記のカリキュラム改訂やFDなどの指導法の改善を含む学修システムの構築によって得られると考える。このため、白鷗大学教育学部では、カリキュラム改訂委員会を設置して、検討を続けてきた。その活動の一つとして、現在の教育学部カリキュラムの科目が達成している資質能力について、担当教員にアンケート調査を行い、その達成度を分析した。その結果、専門的な知識・理解・技能・表現などは、十分達成できていること、論理的思考力・倫理観・生涯学習力などは、平均的に達成できていること、チームワーク・自己管理能力・社会的責任感などは、やや達成できていないこと、グローバル社会への対応・コミュニケーションスキル・数量的スキル・情報リテラシーなどは、かなり達成できていないことが分かった。さらに、専攻・コースや学年次進行に伴う達成項目の推移については、それぞれの専攻・コースの特徴が反映されていることが分かった。今後の課題として、教員養成を含めた進路に応じたカリキュラム改訂を検討し、学生の質保障を推進していく必要がある。

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部

## 1. 研究の目的

大学における質保証は今日的課題であり、多くの大学でその実現に向けて多様な試みを実践している(例えば、新潟大学教育・学生支援機構, 2014)。白鷗大学教育学部においても、少子化が続く現状において優れた学生を受け入れると同時に、今日的な社会が求める資質能力を育成して、学生自身が自己実現できるような進路を支援することが求められている。本学教育学部は、教員養成という目的と同時に、教職以外の職種に就業する学生も抱えていることから、カリキュラムの構成、教員免許をはじめとする各種資格、教育方法、ゼミ・卒論の指導方法など、複数の視点から模索する必要がある。文部科学省の高等教育政策に関する報告書や、大学評価機構などの専門機関からの調査においても、大学の質保証について多くの要請をしている(中央教育審議会, 2005, 2008, 2012)。

以上の背景から、本学教育学部においては、学生に求められる資質能力を明らかにし、その資質能力を育成するためのカリキュラムを編成し、カリキュラムに基づいて教育実践し、その結果を評価して、カリキュラムを改善するというPDCAサイクルを実施することを決め、教育学部カリキュラム改訂委員会を設置し、検討を続けてきた。

上記の委員会が中心になって、いくつかの分科会に分かれ、2013年度において調査研究を行ってきた。すなわち、①教育学部の5専攻・コースに所属する学生へのアンケート(本学への入学動機、カリキュラム・授業科目の評価、進路先、大学への期待など)、②スクールサポートに参加している学生へのアンケート(授業の合間に近隣の小中学校に出かけて、教員の補助などをボランティアとして行う活動)、③授業科目が目指す知識・技能・能力などの教員へのアンケート(学力を基礎にしたアンケートの項目による調査)、④教員養成を主に目的とする大学への訪問調査(5名の教育学部教員による7大学への訪問調査)、の4つの分科会で実施した。

本研究は、上記の③授業科目が目指す知識・技能・能力などの教員へのアンケートについて、その調査方法ならびに分析および得られた結果につ

学士力を基礎とした大学生に求められる資質能力の質保証に関する調査研究  
いて述べている。

## 2. 学士力を基礎とした知識および能力

文部科学省の中央教育審議会は（2008）、学士課程答申において「学士」の学位によって保証されるべき一定の能力を「学士力」という言葉で表現した。この学士力を達成することが、大学の質保証を行う指標として用いられている。この学士力を巡って、様々な高等教育機関や関連学会等で議論されてきた。表1に、学士力の項目を示す。

表1 学士力の項目の一覧

学士力（文部科学省）
1. 知識・理解
(1) 多文化・異文化に関する知識の理解
(2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能
(1) コミュニケーション・スキル
(2) 数量的スキル
(3) 情報リテラシー
(4) 論理的思考力
(5) 問題解決力
3. 態度・志向性
(1) 自己管理力
(2) チームワーク、リーダーシップ
(3) 倫理観
(4) 市民としての社会的責任
(5) 生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力

表1において、1. 知識・理解、2. 汎用的技能、3. 態度・志向性などを統合項目と呼ぶ。表1に示された学士力を達成するために、どのよう

なカリキュラムを編成すればよいかについての概念図を図1に示す。

よく知られているように、大学には3つの基本方針があり、1つは入学者受入方針（アドミッションポリシー）、2つは教育課程編成方針（カリキュラムポリシー）、3つは卒業認定方針（ディプロマポリシー）である（中央教育審議会，2005）。従来はこれらの3つの基本方針について独立して議論してきたが、近年の大学の質保証においては、有機的に関連させて基本方針を策定する必要がある。特に、大学の質保証という観点からは、図1に示したようにディプロマポリシーから逆にカリキュラムポリシーを策定する必要がある。今日では少子化が長期に渡り継続することから、アドミッションポリシーを厳しく設定することは、入学定員を確保ことが極めて厳しい状況にある大学も多いので、現実的ではない。したがって、出口である大学卒業生に備えるべき資質能力をはじめに設定し、そのためにはどのようにカリキュラムを編成し、教育方法を改善し授業評価を高めていくかが、大学に求められていると言える。すなわち、学士力による質保証とは、出口から教育内容や教育方法を改善するという方向であると考えられる。

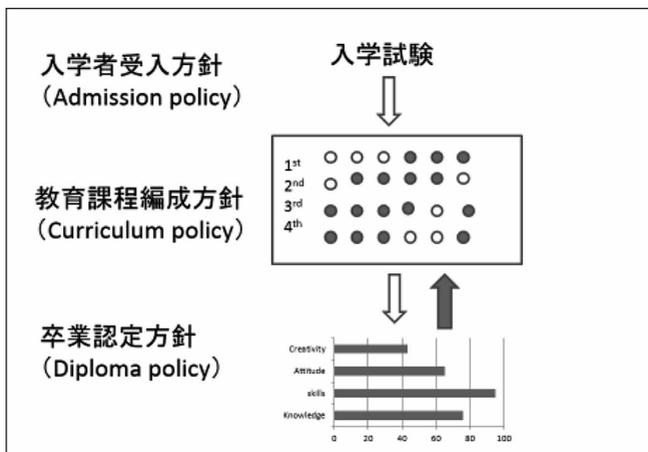


図1 出口から求められるカリキュラム編成方針の模式図

### 3. 教員へのアンケートの方法

#### 3.1 アンケート項目の作成と調査の方法

はじめに出口としての卒業生に求められる資質能力を設定する必要がある。端的には文部科学省から提示されている学士力が基礎になるが、本学のカリキュラム改訂委員会で検討し、統合項目と質問項目を具体的に変更した。表1における統合項目1の知識・理解は、表2において、知識・理解・技能・表現とし、質問項目を4項目に拡張して、教員が回答しやすいように修正した。その他の質問項目は同じであるが、統合項目2については汎用的能力・技能とし、統合項目3については体力・態度・志向性とし、項目名を変更した。そのアンケート項目を表2に示す。

表2 学士力を基礎にした求められる資質能力

統合項目	質問項目
1. 知識・理解・ 技能・表現	①専門的内容についての基本的な知識と体系的な理解
	②専門的内容についての基本的な技能と表現
	③グローバル社会における多様性についての知識・理解
	④常識的な社会的知識および一般的な教養
2. 汎用的能力・ 技能	⑤日本語と特定の外国語を用いたコミュニケーションスキル
	⑥自然や社会的事象について、分析したり、理解する数量的スキル
	⑦ICTを用いて、多様な情報を適切に活用できる情報リテラシー
	⑧情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる論理的思考力
3. 体力・態度・ 志向性	⑨問題を発見し、情報を収集・分析・整理し、解決できる問題解決力
	⑩自らを律して行動できる自己管理能力
	⑪他者と協調・協働して行動できるチームワーク・リーダーシップ
	⑫自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる倫理観
4. 総合的な学 習経験と創 造的思考力	⑬社会の一員としての意識を持った市民としての社会的責任
	⑭卒業後も自律・自立して学習できる生涯学習力
その他の能力や 技能	⑮知識・技能・態度等を総合的に活用し、課題を解決する能力



図2 科目に求められる資質能力などの例

表2における、その他の能力や技能についての項目は、教員が自由に書き込めるように設定した。例えば、図2に示すゼミ・卒論研究のように、いくつかの能力や技能が挙げられる（赤堀，2010，Akahori，2011，谷川，2012）。

さらに、これらの項目について、教育学部の専任教員並びに非常勤講師に、担当科目の目指す知識・技能・能力などについて、表2に基づいてアンケートを実施した。アンケートは、紙によるアンケートとWebによるアンケートの両方を用いた。図3にWebによるアンケートの回答方法の例を示す。

---

#### 【回答方法】

1) インターネットに接続できる端末のブラウザから以下のアドレスにアクセスしてメニューから [授業科目学士力調査] を選んでください。(右のQRコードもご利用ください。)

<http://seminar.hakuoh.ac.jp>



2) 認証のボックスがポップアップされます。以下のユーザー名、パスワードを入力して [ログイン] をクリックしてください。

ユーザー名：hakuoh-edu

パスワード：xxxxxxxx

3) 教職員番号を入力して [ログイン] をクリックしてください。(教職員番号は身分証明証に記載されています。)

なお、ログインできない方は、対象科目がございません。

#### 教員アンケート

4) 今回アンケートを取らせていただきたい科目を1ページ単位に表示されます。学士力の達成度を選択して、入力してください。(科目名称が「他専攻」場合があります、読み替えてご登録をお願いします。)

◎：十分に達成される

○：かなり達成される

△：やや達成される

—：達成されないまたは対象外

回答を入力し、最下部の「登録」ボタンをクリックしてください。  
◎:十分に達成される, ○:かなり達成される, △:やや達成される, —:達成されない。

No.	項目	回答
1. 知識・理解・技能・表現		
1	専門的内容についての基本的な知識と体系的な理解	◎
2	専門的内容についての基本的な技能と表現	◎
3	グローバル社会における多様性についての知識・理解	△
4	学業的な社会的知識および一般的な教養	◎
2. 汎用的能力・技能		
5	日本語と特定の外国語を用いたコミュニケーションスキル	—
10. 知識・技能・態度等を総合的に活用し、課題を解決する能力		
その他、別の能力や技能があれば追加してください。		
16	高度な情報処理能力	◎
17		◎
18		△
19		—
20		—
21		—

5) その他は、内容を直接入力していただき、達成度を選択してください。特にその他がない場合は入力不要です。

[ログイン画面に戻る](#)

6) すべての入力が終わりましたら、[登録終了・次の科目へ] をクリックしてください。複数科目お答えいただきたい先生は、次の科目の入力画面に変わります。すべて、入力終了すると確認画面に変わります。

※ 入力内容を確認したいときは、再度ログインしていただければ、前回登録した内容を確認することができます。確認画面にある [内容修正] をクリックすると、再入力することができます。

---

図3 Webによるアンケートの回答方法

### 3.2 調査データの分析の方法

教育学部の学生が履修する科目について、以下のようにアンケートを実施し、分析を行った。教員アンケートは、平成25年度に教育学部生が5人以上履修した科目を受け持った教員に行った。各調査項目について、「十分に達成される」「かなり達成される」「やや達成される」「全然達成されない」の4段階(それぞれ3, 2, 1, 0点に得点化)でそれぞれ自己評価を依頼した。

学生の履修科目のデータは、各専攻・コース別の2013年度卒業生の履修科目を、それぞれ10人をランダムで抽出した。すなわち、各専攻・コースにおいて、典型的なカリキュラムをモデル的に示すことはできるが、現実的でないので、上記のように実際に科目を履修している学生のデータを収集し、その代表的な履修科目を取り出し、各専攻・コースおよび各学年のデータとして、以下のように分析をした。

専攻・コース別の特徴比較は、教員から得た履修科目の自己評価と、各専攻・コースの履修生のデータを組み合わせ、平均値として表した。

学生の年次別推移は、教員から得た履修科目の自己評価と、各専攻・コースの履修生の履修年度とを組み合わせ、平均値として表した。また、結果には統合項目を用いることとし、統合項目内の値を平均値として表した。

## 4. 結果と考察

回答は、教育学部で開講している全体の606科目中、434科目の回答を得た。回答率は、71.6%である。以下、このデータを基に分析した結果を示す。

### (1) 専攻・コース毎のアンケート結果

図4に、その比較のグラフを示す。横軸は、前に述べたように、「全然達成されない」を0点、「十分達成される」を3点として、0から3までの得点として表示してある。0から3までの中央値が1.5であるので、1.5以上を達成されている項目、1.5以下を未達成の項目とみなせば、達成されている項目は、①専門的な知識や理解、②専門的な技能や表現、④社会知識および一般的な教養などである。また、⑧論理的思考力や、⑭自立して学習できる生涯学習力なども、比較的高い得点を示した。これに対し、未達成とみなされる項目は、③グローバル社会における多様性、⑤外国語を用いたコミュニケーションスキル、⑥分析したり理解する数量的スキル、⑦情報を適切に活用できる情報リテラシーなどである。以上から、専門的知識や理解などは、優れているが、グローバル社会における多様性の理解や、コミュニケーションスキルや、数量的スキルおよび情報リテラシーは、弱いと言える。このことは、これらの能力を育成するためのカリキュラムが整備されていないことも一つの原因であると考えられる。

次に、専攻・コース別の特徴について述べる。英語教育専攻で特に高い得点を示した項目は、③グローバル社会における知識・理解や、⑤外国語を用いたコミュニケーションスキルであり、カリキュラムから考えて、妥当な結果である。心理学専攻においては、⑦ICTを用いた情報リテラシーや、⑧論理的に分析し表現できる論理的思考力、⑨問題を発見し解決する問題解決力などが、高い得点を示した。これも、心理学専攻におけるカリキュラムやゼミの指導などを考えれば、妥当な結果と思われる。スポーツ健康専攻においては、②専門的な技能と表現、⑩自らを律する自己管理能力などは、英語教育専攻と共に高い得点を示した。この特徴は、スポーツ健

康専攻のカリキュラムや価値観から考えれば、妥当な結果と言える。小学校コースと幼保コースは、すべての項目に平均的な得点を示し、特に高い項目や低い項目は見受けられない。これも、児童教育専攻の特徴を示していると思われる。

## (2) 学年次毎にみた達成能力の推移

図5に、縦軸に各専攻・コースと学年次、横軸に達成度の得点を示し、グラフ中のカテゴリーは表2における統合項目を示す。

全体的に2. 汎用的能力・技能は、低い傾向にある。但し、学年進行にしたがって、得点が高く推移する傾向にある。最も高い得点を示した統合項目は、1. 知識・理解・技能・表現であり、特に3年次において高くなる傾向がある。4年次には履修科目が少なくなりその影響で1. 知識・理解・技能・表現は、低くなる傾向がある。全体的な傾向とすれば、3年次に各統合項目は高い得点を示している。

以上のことから、全体的に区分するとすれば、1年次は専門科目を履修するための準備期間、2年次は専門的内容の知識・理解を蓄積する期間、3年次はこれらを教育実習やフィールドなどに適用し発展させる期間、4年次は卒業研究などでまとめて統合する期間と区別することができる。

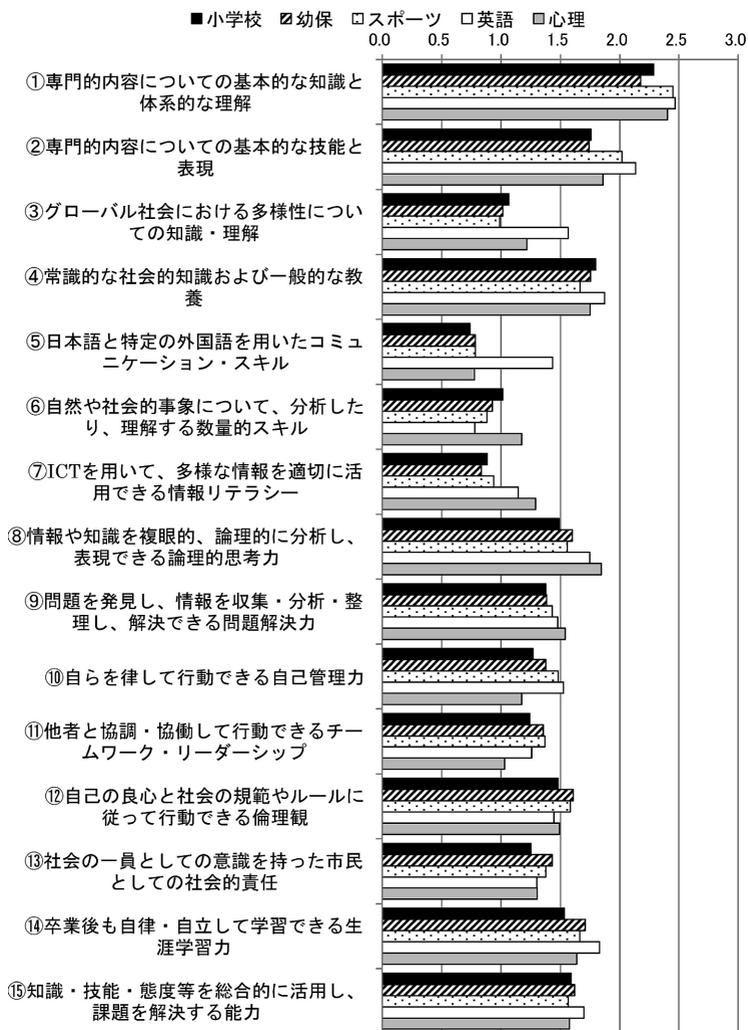


図4 専攻・コース別の特徴比較

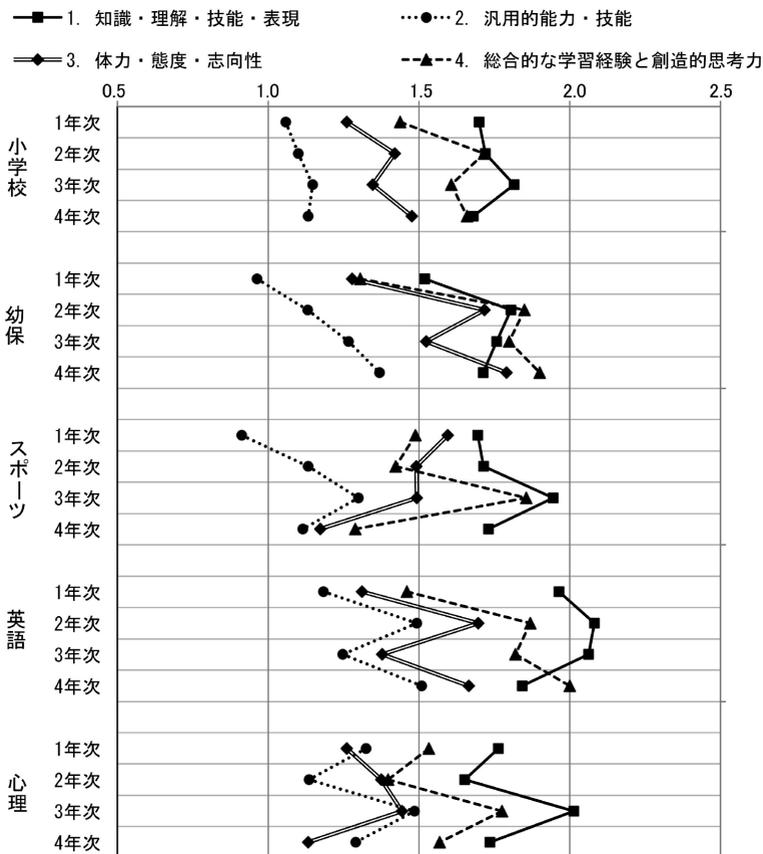


図5 専攻・コース別の年次別推移

## 5. まとめ

教育学部のカリキュラム改定の目的の元に、いくつかの調査・研究活動を行ってきた。その1つとして、教育学部学生が履修している科目について、その科目を担当する教員にアンケート調査を行った。教員は、専任教員だけでなく非常勤講師も対象としたが、回収率は71.6%とやや低い値であるが、その結果を学士力の項目を元に分析をした。その結果は、以下の

ようにまとめられる。

- (1) 全体的に専門的な知識・理解・技能・表現は、高い達成率を示している。
- (2) 汎用的能力・技能は、比較的低い達成率を示している。
- (3) 特に、グローバル社会における多様性についての理解、外国語を用いたコミュニケーションスキル、分析などの数量的スキル、ICTを用いた情報リテラシーなどは、目立って低い値を示し、今後の課題と考えられる。
- (4) 論理的思考力、問題解決力、自己管理能力、倫理観、社会的責任、生涯学習力、課題を解決する能力など、社会で求められる規範意識や態度・志向性および汎用的能力などは、平均的な値を示している。
- (5) 専攻・コース別では、英語教育専攻では、コミュニケーション能力やグローバル社会への理解などが優れ、心理学専攻では、論理的思考力などが優れており、各専攻のカリキュラムの特徴が表れている。

以上から、これからの教育学部のカリキュラムとしては、以下のような改善のための示唆が得られる。

- (1) 教員養成を主とする専攻・コースや学生に対しては、専門的な知識・理解・技能・表現を学修させると共に、自己管理能力・チームワーク・倫理観・社会的責任・生涯学習力などがさらに求められる。このような能力を育成するためのカリキュラムの改善や、指導法が求められる。
- (2) 教員養成以外の進路、例えば公務員や一般企業などを目指す専攻・コースや学生に対しては、特に低い値である、グローバル社会への理解・外国語を用いたコミュニケーションスキル・現象を分析する数量的スキル・情報リテラシーなどを高めるためのカリキュラムの改善や指導法が求められる。
- (3) 教員養成および、それ以外の進路において、求められる能力については、専門家や実務家への調査などを行い、より正確な分析をする

ことが必要であろう。

本研究の遂行にあたり、教育学部の科目を担当した非常勤講師を含む教員の皆様に、アンケートの協力をいただき、厚く御礼申し上げます。また、奥澤信行、荒井弘高、神戸文朗、宮里恭子、藤井和彦の教育学部カリキュラム改訂委員会の委員の皆様に、ご議論いただき深く感謝致します。さらに、白鷗大学教務部の武笠幸司、情報処理センターの大手優、教育学部長室研究員の土岡丈敏の皆様に、心から厚く御礼申し上げます。

なお本研究は、白鷗大学総合研究所（2013年度）の研究助成を受けました。記して、感謝申し上げます。

#### 参考文献

- Akahori K.: Revised Design-Based Research Methodology for College Course Improvement and Application to Education Courses in Japan, EDUCATIONAL TECHNOLOGY, November-December, pp.26-33 (2011) in USA
- 赤堀侃司：大学授業改善の方法論と教職に関する科目への適用、リメディアル教育研究、第5巻第2号, pp.65-72 (2010)
- 谷川裕稔（代表編者）「学士力を支える学習支援の方法論」ナカニシヤ出版,京都（2012）
- 中央教育審議会：我が国の高等教育の将来像（答申）（2005）
- 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申）（2008）
- 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）（2012）
- 新潟大学教育・学生支援機構：新潟大学アセスメントシステム、  
<http://www.iess.niigata-u.ac.jp/nbas/index.html>（2014年7月現在）